

# 遺言状

野村胡堂

一

柳原の土手下、ちようど御郡代屋敷前の滅法淋しいところに生なま首くびが一つ転がっておりました。

朝市へ行く八百屋さんが見つけて大騒ぎになり、係り合いの町役人や、弥次馬まで加わって捜あげした揚句、間もなく首のない死骸やぶが水際の藪やぶの中から見つかり、それが見知り人があつて、豊島町一丁目で公儀御用の紙問屋越前屋えちぜんやの大番頭清六と判つたのは、大

分陽が高くなつてからでした。

ガラツ八の八五郎の大袈裟おおげさな注進で、銭形平次が来たのはまだ  
検屍前。

「寄るな寄るな見世物じゃねエ」

そんな調子で露払いをするガラツ八の後ろから平次は度つつまし  
い顔を出して、初秋の陽の明るく当る筵むしろを剥ぎました。

殺された清六は五七八、小作りの胡麻塩鬘ごましおまげ、典型的な番頭で  
すが、死骸の虐むいたらしさは、物馴れた平次にも顔を反そむけさせます。

「辻斬でしょうね、ひどい事をするじゃありませんか」

八五郎は横から覗きました。

「——」  
平次は黙って首を振りました。こんな下手へたな辻斬があるわけもありません。

「越前屋からは、まだ引取り手が来ませんよ。親分」  
八五郎はそれが不平そうです。

「ツイ二十日前に、主人が卒中そつちゆうで死んだばかりだから、無理もないが——」

町役人は弁解がましく口を入れました。そう言えば越前屋の主人佐兵衛が急死したことは、平次もガラツ八も聴いておりました。重なる不幸で、越前屋の混雑は思いやられます。

「——その上店のこと万端取仕切っている甥おいの吉三郎さんが、大阪へ商売用で行っているとかで、迎いの飛脚ひきやくを出す騒ぎでしたよ」  
町役人は更に注ちゆうを入れました。

「濡れ手拭を持っていてるところを見ると、風呂の帰りでしょうね。  
親分」

「鬢びんも濡ぬれているよ。——風呂の帰りに、わざわざ柳原河岸へ出るのは変じゃないか。それに——」

平次は首を傾かたむけております。

「何か変なことがあったんですか、親分」

「変なことだらけだ」

「首を斬るのは穏かじゃねエ。辻斬でなくても、下手人は武家に決つてるようなものですね」

と八五郎。

「穏かな人殺しというのはないだろうが、——この下手人は武家じゃないよ」

「へエ——」

「やつとうの心得などのない人間だ」

「何だつて、それじゃ首を斬り落したんでしょ」

「それが解れば一ぺんに下手人が拳がるよ」

「？」

「どうかしたら、一度絞め殺して置いて、それから首を斬り落したのかも知れない。生き身の人間がこんなに斬りさいなまれながら、黙って居るわけはねエ、いくら柳原でも、家もあれば人も通る」

平次は早くも事件の秘密に触れて行くのでした。

「親分、死骸の側にこんな物が落ちていたそうだが、何かの役に立ちますかえ」

懐中煙草が一つ——印伝いんでんの吠かますに赤銅しゃくどうの虻あぶの金具を付けた、見事な品を町役人は平次に渡しました。

「これは良いものが手に入った。何処に落ちていたんだ？」

「死骸の下敷きになってましたよ」

「文句はねエな。死骸の下に煙草入をねじ込むような物好きな野郎はあるめえから」

ガラツ八は又尖とがった口を入れます。

その時、ドカドカと駆け付けて来たのは、豊島町一丁目の越前屋の人達です。

二

越前屋の同勢の中で頭立ったのは、これも主人の甥おいで金次とい

う若者。まだ二十五六の、遊び癖ぐせの抜け切らないのを、叔父の佐兵衛に引取られて、年上の従兄いとこ吉三郎といっしよに、商売を仕込まれているといった、ちよつと好い男です。

そのほか姪めいのお辰といつて、二十一になる美しいの、居候で浪人者の岩根源左衛門。これは名前だけは怖おっかない敵役のようですが、ヒヨロヒヨロとした青白い四十男で、剣術よりは下駄はなの鼻緒おを直したり、障子を張つたり月代さかやきを当つたりすることのうまい人間です。あとは奉公人多勢、唯のほせもう逆上気味で、番頭の遺骸を中に騒ぐばかり。

「店の支配人はいないのか。——騒いでばかり居ちや調べができ



ない」

検屍の同心かりた苅田孫右衛門は、駆けつけ様、この混乱を睨め廻しました。

「へエ、支配人の吉三郎は大阪へ行っております」  
甥の金次は小腰を屈めます。

「番頭の清六が殺されて、支配人が留守だとすると、あとの取締りは誰がするのだ」

「私でございます、へエ」

若くて少し道楽強そうな、金次に、越前屋の取締はできるかどうか、同心苅田孫右衛門も胡散うさんな眉を寄せました。

「支配人はいつ帰るのだ」

「二十日前に主人佐兵衛が頓死とんしいたしましたので、その日のうちに大阪へ急使を出しました。何分上り下り二十四日の旅程で、大阪で出発前に一二日手間取ると見ても、あと六七日経たなければ、江戸へは戻りません」

「それでは、支配人の吉三郎が戻るまで、お前が代って店の支配ををすると思つて差支えはあるまいな」

「へエー」

「ここでは調べもなるまい。一同の者は番所へ参れ、死骸も運んで来るがよい」

苅田孫右衛門が先に立って、一同の者はツイ眼と鼻の間の、浅草橋番所へ引揚げました。

調べの結果、いろいろの事が判って行きます。主人佐兵衛が二十日前に死んだのは、明かに卒中で、これは越前屋の者が口を揃えて言うことに疑いありません。

支配人の吉三郎はちょうど三十の働き盛りで、評判の商売熱心、伯父の代理で大阪へ行つたのは一と月前、ゆくゆく越前屋の身上しんしょうはこの甥おいに譲られるだろうという噂もありますが、一方吉三郎と嫁めあわ合せる筈で、同じ越前屋に引取つて養つている姪めいのお辰は、もう一人の甥の金次と気が合い、とかく吉三郎を嫌う様子があり、

佐兵衛はそればかり気にしておりました。

吉三郎と金次は、どちらも佐兵衛の甥に相違ありませんが、年上の吉三郎は少し陰気ですが、しりよ思慮分別もあり、人間も堅くて、商売熱心な上、伯父の佐兵衛にもことごとく気に入っておりますが、若い甥の金次は、明るくて好い男で、皆んなに可愛がられる代り、道楽気が抜けないので、伯父の佐兵衛には、甘えたり、叱られたり、まるっ切り子供扱いにされております。

「昨夜の事をくわ詳しく申して見るが宜い」

苧田孫右衛門はうなが促しました。

「番頭の清六どんが、手拭を下げてブラリと出たのは、店が閉つ

てから——いっっはん戌刻半（九時）時分でございました。清六どんは恐ろしい湯好きで、内風呂の立たない晩は、かならず町内の巴風呂へ参ります」

金次は皆んなの顔を見ながら、思い出し思い出しつづけました。  
「——清六どんの出たのは、皆んなよく存じております。それっ切り一刻待っても帰らないので、表戸を閉めさせ、裏口を開けて寝てしまいました」

「不用心じゃないか」

「でも、夜遊びなどする人ではなし、必ず帰ると思われましたので」  
「それっ切り帰らなかったのだな」

「へエ。——ゆうべ帰らないのを、今朝になつて気がつきました、

店中で騒いでいると、柳原で殺されているというお使いで——」

「ところで昨夜誰も出た者はないのか」

「なかつた筈でございます」

「裏口を開けたまま寝てしまつたのなら、それから出た者があるかも知れないではないか。——風呂から帰りかけている清六を途中から柳原へ誘い出して、殺すという術もある——」

苧田孫右衛門はさすがに気が付きます。

「番頭さんは長湯かえ」

銭形平次は不意に口を挟みました。

「いえ早い方で、每晚入るから。——俺のは鳥からすの行水ぎょうずいだ——と申しておりました」

金次はぼんやり顔を挙げます。

「表戸を締めたのは、確たしかに番頭が出てから一刻も経った後だろ  
うな」

「手代の巳之松と丁稚の三吉が締めました。間違いはございませ  
ん」

「その間お前は何をしていたんだ」

「帳場で帳合を見ておりました」

「誰も外へ出たものはないな」

「へエ」

平次は細かく店中の者の不在証明アリバイを調べて行くのです。

「お辰さんは？」

「奥でお仕事をしておりました」

これも金次の証明ですが、手代、小僧、誰の顔にも、それに反対の色はありません。

「岩根いわねさん——とか言いましたね。旦那は？」

「裏の四畳半——これは私の部屋だ。そこへ潜もぐって、早寝をして居りましたよ」

居候浪人——岩根源左衛門は多勢の後ろから、首だけヒョロ高



い身体を浮かしました、恐ろしく碎くだけた二本差です。

「お部屋へ引取った時刻は？」

「酉刻半むっはん——いや戌刻いっつ近かつたかな。小僧の三吉がよく知っているよ」

その部屋から、そつと拔出せるかどうか、それはいずれ後刻実地を調べる外はありません。

「ところで、この煙草入は誰の物だ」

平次はズラリと並んだ越前屋の奉公人の鼻先へ、何の技巧ぎこうもなく死体の下にあつた印伝いんでんの煙草入をズイと出したのです。

「私の品でございますが」

金次の答えも、それに劣おとらず無造作でした。

「これが死骸の下から出て来たのはどういうわけだ」

「――」

恐ろしい緘黙かんもく、重おもい苦くるしい空気の中で、越前屋の奉公人たちは、お互の顔をそっと盗み見ております。

三

それから二日、越前屋の番頭殺しの下手人は、わけもなく拳こぶしがりそううで、一向眼鼻もつかつかななかかつたのです。

越前屋は数万両の大身代で、その跡取は当然問題になるべき筈ゆいじんじょうですが、遺言状を預っている筈の番頭清六が殺され、支配人の吉三郎が大阪から帰らなくては、何が何やら見当も付きませぬ。一番疑われるのは、当然吉三郎と相続争いになる甥おいの金次ですが、金次は亥刻半よつはん（十一時）過ぎまで帳場に居たことが明かになり、早い湯の清六がそれまで風呂に浸ひたっている筈はないのですから、これは煙草入の証拠があつたに拘かかわらず、辛からくも縄目を免まぬれました。尤もその煙草入も半歳ほど前に支配人の吉三郎から貰ったもので、滅多に持つて歩くようなザツな品ではないということも弁解の一つになりました。

浪人の岩根源左衛門も佐兵衛の遠縁に当るそうで、遺言状がなくなれば、何かの利得にありつける一人ですが、当夜自分の部屋で早寝をしたというに嘘はなく、店中の人の起きているうちは、人に姿を見られないように、外へ出ることなどは思いも寄りません。

姪のお辰も当然疑いの圈内けんないに入るべきですが、二十一になる華奢なお辰では、虫一匹潰すのさえむずかしく、大の男の首をちょん切ることなどは、どう考えても出来ないことです。この上は支配人の吉三郎が帰るのを待って、第二段の活動に入り、遺言状でも捜し出して、下手人の当りをつける外はないことになりました

が、清六が殺されてから二日目の晩、

「親分、助けて下さい」

むいこうやなぎはら

向柳原の叔母さんの家にとぐろを巻いて居るガラツ八の八五郎のところへ、思わぬ人間が飛込んで来ました。

「何だ、植木屋の松さんじゃないか。どうしたというんだ」

それは近所に住んでいる植木屋の松五郎という中年男、八五郎とはよく馬の合う正直者です。



©2017 萩 柚月

「あつしは殺されそうなんで」

「何を言うんだ、親の敵でも討たれる覚えがあるのか」

「冗談じゃありませんよ」

「それとも人に狙われるほど金でも入ったのか」

「それなら有難てえが。——相変らずのピイピイで」

「さア判らねえ。女出入りにしちや、松さん少し汚なく老<sup>ふ</sup>け過ぎたぜ」

八五郎は何処までも茶にして居るのです。

「ともかく、聞いて下さいよ、八五郎親分。おとつ一昨日の晩は越前屋

の帰り、柳原でいきなり暗闇から白刃で突っかけられ、はだし跣足に

なつて逃げ出したし、ゆうべは家へ押込みが入つて、すんでの事に寝首を搔かれるところだったし、ツイ先刻は両国橋の上から、もう少しで大川へ突き落されるところでしたよ。欄干らんかんに掴まつたから宜いようなものの、そうでもなきや、あつしは徳利同様だ。

今頃は土左衛門になつていてるところで。——ブルブルブル」

松五郎は首を縮ちぢめるのでした。

「なるほどそいつは物騒だ。——何か人に狙われる覚えがあるのかい」

「ないことはありませんよ」

「何だい、そいつは？」



「越前屋の番頭さんが殺された一件で」

「フーム」

八五郎もツイ乗出しました。

「あっしはね、越前屋の亡くなつた旦那には可愛がられましたよ。お前は少し馬鹿だが正直で気がおけなくて宜い——つて」

「なるほどね」

「——で、番頭の清六さんとあっしを呼んで旦那の仰しやるには——私もだんだん取る年で、何時ほつきり行かないものでもない。

気になるのは死んだ跡の越前屋の相続だ。口で言つたんじゃ世間で信用しない者もあるだろうから、ゆいごんじょう遺言状を作つて、私が死んだ

後、甥の吉三郎と金次と、姪のお辰と、それに番頭の清六とお前が立ち会いの上で見ることにして置きたい——と斯こういうわけ  
で」

「フーム、フーム」

「番頭の清六さんとあっしを手伝わせて、三人力を協あわせて遺言状を隠しましたよ」

「どこに隠したんだ」

「そいつは滅多めったに言えません。番頭さんが、死んだ上は、吉三郎さんが、大阪から帰った上で、皆んな顔を合せて、あっしから申上げ、遺言状を取出して、その通りにしなきゃなりません」

「お前を殺して、どうしようと言うのだろう——その遺言状を奪<sup>と</sup>る気かな」

「あつしを殺せば、遺言状の隠し場所は誰にも判りやしません。番頭さんは殺されてしまったし、遺言状はそのまま腐<sup>くさ</sup>ってしましますよ」

「腐<sup>くさ</sup>ってしまう」

「へエー」

「ともかく、そいつは俺一人の思案じゃ埒<sup>らち</sup>があかない。ちよいと銭形の親分のところへ行<sup>い</sup>って見ないか」

八五郎はさすがに己<sup>おのれ</sup>を知<sup>し</sup>っておりました。

「もう外へ出るのは御免ですよ。ここへ来るんだって、容易のこ  
とじゃなかったんで。誰か跟つけている様子で」

「気の弱いことを言うな」

「でも、どこから白刃しらはが飛出すか、わかったものじゃありません」

「よしよし、それじゃ俺だけ行って来る。此家ここから外へ出ちやな  
らねえよ」

「出ろつたって出やしません」

「大丈夫だな」

八五郎は万事を叔母に任せて、親分の銭形平次の家へ駆けつけ  
ました。

四

ガラツ八が平次をつれて引返して来たのは、それからほんの一刻の後。

「松五郎さんはすぐ帰ったよ」

あれほど頼まれた叔母は、けろりとして斯こんな事をいうのです。

「えッ、あんなに言つて置いたのに、何だつて帰つたんだらう」  
八五郎ははなはだ拍子抜けの気味でした。

「だって松さんの倅の——丑松とか言つたね。——あの子が迎え

に来たんだよ」

「仕様がないなア」

「松五郎の家というのは遠くはあるまい。行って見ようか、八」  
平次は気軽にそう言ってくれます。

そこから、松五郎の家までは、ほんの五六丁。

が、二人は行き着く前に、大変な事件にでつくわしていたので  
す。

「何だえ、八、あの人だからは？」

柳原土手、提灯の行き交う中へ、平次とガラツ八は顔を持って  
行きました。

「あ、大変ッ、松さんが」

それは思いも寄らぬ事でした。植木屋の松五郎は後ろから胸のあたりを一と突きにされて、土手の上のこと切れ、血だらけの死骸に取とり縫すがって、十二になる倅の丑松は泣いているではありませんか。

「どうした、丑松」

それを抱き起すように、八五郎。

「わーん、ちゃんが、ちゃんが、親分」

小倅はもう他愛もありません。

いろいろなだめて訊きくと、八五郎の叔母の家から父親とつれ

立って、此処までやって来ると、いきなり後ろから追い抜いた男が、父親——松五郎の背中から脇差を突っ立て、はッと思う間もなく逃げ去ったというのです。

素より人相も判らず、身扮みなりもはつきりしません。

盗られたものは一つもなく、急所の重傷に、松五郎は直ぐ息が絶えた様子ですが、死に際にたった一と言。

「ちゃんは苦しそうに、石、石、——って言ったよ。石を拾って、悪者へ抛ほうれという事かと思つたが、真つ暗でもう何んにも見えなかつたんだ」

丑松の言つたのはたったこれだけ、何の事やら見当もつきませ



ん。曲者の姿で、おさな幼い丑松の眼にも気の付いたのは、わらしぎゃはん草鞋脚絆に足を堅めていたことですが、その晩は小雨が降って、何となく薄寒かったので、曲者が草鞋脚絆に身を堅めていたところで大した不思議ではありません。

植木屋の松五郎殺しが、越前屋の番頭殺しと、脈を引いていることは判りますが、下手人は誰かということになると全く五里霧中です。

越前屋の金次にも、浪人の岩根源左衛門にも、完全な現場不在ア証明イがないにしても、大した怪しい節もなく、お辰もこの場合も疑いの外に置かれず。

わけでも、金次はその時分風呂へ行つたと判り、疑えば疑える地位に立ちましたが、風呂屋の番台で聴いても、確かに湯に入つており、それにわざわざ、あしこしら足拵えなどをする隙がひまあろうとも思はず、浪人者の岩根源左衛門は、相変らずの早寝で、外へ出た様子もありません。

「親分」

「何だ、八」

八五郎が飛込んで来たのはその翌る日の朝でした。

「三輪の万七親分が金次を挙げましたぜ」

「へエー」

「清六殺しと松五郎殺しですって」

「そいつは変だな」

「大丈夫でしょうか、親分」

「俺はそれより、浪人者の寝る四畳半に、抜け穴でもないか、それを捜した方が早いと思うよ」

「あの浪人者が。——下手人ですか、親分」

「いや、そうらしくないから困るんだ」

「姪めいのお辰はどうでしょう。——あの女はやけに綺麗だが、何を訊いても物を言わず、二人が殺された時刻にも、何処にいたか判りませんよ」

「まさか、あの娘の手際じゃあるまいよ」

平次はあまり取合いません。

「それから、大阪へ支配人を迎えにやった越前屋の使いの者が今日帰ったそうですよ。丁度二十四日目だ。支配人の吉三郎は二日遅れて発った筈だから早くて明日、遅ければ明後日江戸へ入るんですって」

「フーム」

「越前屋から、今朝迎いが出ました。川崎の万年屋まんねんやで落ち合う筈だそうで——」

「行こう、八」

銭形平次はいきなり立ち上がりました。

「何処へ行くんだ、——親分」

「川崎の万年屋だ。大阪から帰って来る支配人に会って、いろいろ訊いて見たい」

「へエー」

ガラツ八には何が何やら判りませんが、こうなると、銭形平次に引摺<sup>ひきず</sup>られて動く外はありません。

## 五

平次と八五郎が川崎の万年屋に着いたのは、その日の昼少し過ぎ、越前屋の手代二三人は、お茶を呑んだり、外を覗いたり、落つかぬ様子で支配人の着くのを待つて居ります。

「おや錢形の親分さん？」

げげんな顔をする手代達に迎えられて、

「大師様の帰り、ちよいと覗いて見ただけさ」

平次は事もなげですが、大師様をだしに使うのはくすくす慥たしかつたいのか、

八五郎はテレ隠しにポリポリ小鬢こびんを搔かいております。

そのうちに、

「来ましたよ。あれ、向うから支配人さんが」

物見に出て居た小僧が飛んで来ました。それツと店先へ出ると、  
「おやおや、わざわざ多勢でここまで来て下さったのか、それは  
御苦労様で」

越前屋の支配人吉三郎は、長途の旅に困憊こんぼいし尽した姿ながら、  
埃ほこりだらけの顔にも豊かな微笑を浮べて、皆んなの前に近づくので  
した。

「ゆうべの泊りは何処でしたえ」

不意に声を掛けたのは八五郎です。

「戸塚の米田屋よねだやで——」

「その前の晩は？」

「大磯の虎屋で——あ、お前さんは、どなただえ」

吉三郎はまじまじと八五郎の顔を見るのでした。それを横から取って銭形の平次は、

「吉三郎さん、留守に大変な事が起つたよ。番頭の清六さんと植木屋の松五郎が殺されて、大旦那の遺言状がなくなる騒ぎさ」

「えッ」

「あつしは平次だ」

「銭形の親分さん。——そうでしたか、それはそれは」

吉三郎は漸く<sup>ようや</sup>平静を取戻した様子です。

それからは何事もなく、迎えの店の人達といっしょに、少し足



を痛めたらしい吉三郎は、平次を加えて、何彼と打ち語りながら、江戸へ入りました。

吉三郎が帰つて来ると、越前屋も何となく落着きを取戻して、日頃の秩序ちつじょが蘇よみがえります。

跡目の相続は、吉三郎か金次か、それともお辰か、いずれ親類が寄つて、亡くなつた佐兵衛の氣持を考え合せた上、何とか決めることになりましたが、それにしても、せめて三十五日が済んでからというのが吉三郎の穩当な主張でした。

松五郎殺しの疑いで、三輪の方七に挙げられた金次は、三日経つても、四日経つても帰らず、そのまま清六松五郎殺しの下手

人に決るのではないかと思われた七日目の晩、平次の家へ——、「親分さん、どうぞ、金次さんを助けて下さい。あの人は人なんか殺すような悪い人じゃありません。お願い——」

転げ込んで来たのは、越前屋の姪めいのお辰でした。

二十一になるというのに、子供子供した美しさで、その純情さも、一と通りではない様子です。

「お辰さんじゃないか。どうしたというのだ、今頃——」

「今晚親類たちが寄って、私を吉三郎さんといっしょにして、越前屋の後を継がせることに決めました。私はもう」

お辰は唯たださめざめと泣くのです。

「支配人の吉三郎さんは、それで、どうしたんだ」

「一応は辞退して居ましたが、皆んなで決めてしまつては、どうしようもありません——吉三郎さんが跡を取つても構いませんが、私は嫌で、嫌で」

「よし、判つた。俺もあの吉三郎という男は虫が好かないよ。そのうちに何とかなるだろう、少し待ってくれ」

「でも私は、越前屋へは帰られませぬ」

お辰がむずかっている真つ最中でした。

「親分、判つた。——ああ、草臥くたびれた」

疾風はやてのように飛込んで来たのは埃ほこりだらけの八五郎でした。

「八、御苦勞だったな。どうだ様子は？」

「川崎から真つすぐに東海道を、大磯まで行きましたよ。吉三郎が前の晩泊ったという米田屋で訊いたが、その晩は講中の客で一杯、ふりの客は皆んな断っている」

「大磯の虎屋は？」

「こいつは大笑いだ。大磯に虎屋なんて旅籠屋はないぜ。大磯に虎屋があるなら、少将屋しょうしようやもあるだろうって、ヘッヘッ」

「そんな事だろうと思つたよ」

「すると、あの吉三郎の野郎が」

「うん、あの野郎だ。大阪から江戸まで十二日の旅だが、はやびぎやく早飛脚

は十日から八日を通すのが常法だ。三枚で飛ばせば七日でも来られないことはない。あの野郎、越前屋から行った急使を一日早く発たせて、その後から金に糸目をつけずに飛ばし、七日目か八日目に江戸へ着き、案内知った自分の家へ紛れ込んで様子を探った上、金次の煙草入を持出して、清六の風呂へ出るのを待ち受け、途中から柳原河岸へおびき出して殺したんだ」

「首を斬ったのは？」

「煙草入が証拠にならなかつたら、浪人の岩根源左衛門に疑いに向けるつもりだったのさ」

「へエー」

「それから松五郎を狙<sup>ねら</sup>って殺し、遺言状をうやむやにして越前屋を乗取るつもりだったんだろう。吉三郎は支配人面をして威張<sup>つ</sup>ていても、主人の佐兵衛は目が高いから、跡目は人の好い金次に継<sup>つ</sup>がせるつもりだったのさ」

「へエー、どうしてそんな事がわかったんです、親分」

「俺は小僧の三吉に頼んで、吉三郎の道中差を盗み出させたよ。よく拭いてはいるが、脂<sup>あぶら</sup>でベツトリだ」

「へエー」

「さア行こう、これだけ証拠が揃えば文句は言わせねえ。面倒な事が起つたら、道中の問屋場と人足を調べるまでの事だ。——松

五郎を殺して引返し、川崎へ埃だらけになって来た足取りを調べただけでもたくさんだ」

平次とガラツ八は、その足で直ぐ越前屋に飛込み、落着き払つて親類会議のお祝儀しゅうぎを受けている吉三郎をキリキリと縛り上げました。

「太てえ野郎だ、神妙にせい」

いやもう八五郎の威勢のよかつたこと。

×

×

金次は、間もなく許されて帰り、お辰は平次の口添くちぞえで、金次と祝言することになりました。

が、困ったことに、越前屋佐兵衛が、番頭の清六と、植木屋の松五郎に手伝わせて隠したという、大事な遺言状の行方がわからず、越前屋の跡を継ぐ者もないままに、五日十日と過ぎました。

「親分、遺言状はどうしたでしょう」

越前屋の家中の者を指図して、家の中から土蔵まで、床下天井の差別なく捜し抜いた八五郎は、毎日帰って来ると斯<sup>こ</sup>う平次に聴くのでした。

「待ってくれ、八。死んだ主人が一人で隠せなくて、番頭清六と植木屋の松五郎に手伝わせたと言ったろう」

「だから敷石を剥<sup>は</sup>いだり、井桁<sup>いげた</sup>を崩<sup>くず</sup>したり、土蔵の壁まで崩しま



したよ」

「そんな場所じゃあるまい。それから、松五郎は死に際に、俵の丑松に何とか言ったそうじゃないか」

「石を抛ほうれと言ったんでしよう」

「それだよ、石、石と言ったのは石を抛れというのではなかったんだ。重い石——重い石——、判ったよ。八」

「何処です、親分」

「越前屋の菩提所ほだいしよはどこだ？」

「谷中の長海寺で——立派な塔とうがありますよ」

「それだッ」

平次の推理は見事に的中すいりしました。谷中の長海寺の越前屋の墓所の塔の中に、金次をお辰と嫁めあわ合せて越前屋の相続人にすると書いた佐兵衛の遺言状は、その晩のうちに見つかったのでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

遺言状

初出―「文藝讀物」昭和十八年十月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第七卷  
河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>